

うきたむ

第17号

2001.5.20

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117 TEL0238-52-2585

FAX0238-52-4665



日向洞窟にて

博物館や資料館の展示品は、見る人にさまざまな想いを抱かせてくれます。科学の博物館では、宇宙の神秘や不思議な生物の世界、最新の科学技術などに触れることができます。歴史関係の博物館では、遠い祖先の営みの様々な場面に想いをはせることができます。

ところで、普段はそこにあるのが当たり前の展示品ですが、そのひとつひとつにはその「もの」にまつわる歴史があります。そしていろいろな「ひと」のかかわりがあります。

例えばこの考古資料館の展示品・・・遠い昔にそのものを作ったひと、使ったひと、そして現代、そのものを発掘したひと、また、出土品を洗い、復元し、報告書などにまとめたひと、その成果から研究をするひと、多くの出土品の中から展示するものを選んだひと、展示のしかたを考えたひと、そしてきょう、資料館を訪れる「ひと」。

私がかかわった遺跡の出土品もいくつかこの資料館に展示されています。発掘した時のこと、一連の整理作業のこと、その中の苦労や楽しかったことなど、展示されているものに再会するたび思い出します。同時に、個人の想いとは別に、その「もの」は独り歩きしてゆきます。見る人によりその評価も変わり、価値観もまた様々です。立派に独り歩きし、見る人と対話し、また多くの研究者に取上げてもらえれば、かかわったひとりとして、うれしいと思います。

「もの」も「ひと」

山形県教育庁社会教育課文化財保護室

長橋 至

今年も多彩な行事でスタート

開館九年目の今年度の事業企画がほぼ確定した。これまでの事業をさらに充実させ、また新たな企画も加え、一層の発展が期待される。企画展をはじめ、主な事業内容を紹介しよう。

第10回企画展 「発掘された山形の城館跡」

いま中世城館跡が静かなブームとなっている。県内でこれまでに発掘調査された城館跡は、二〇カ所をこえる。これを機会に出土した主な遺物を展示して、山形の城館跡の全容にせまるところをねらいとする。

中世にうちつづいた戦乱のなかで、城館は軍事だけではなく政治や文化の中心でもあった。天にそびえる天守閣や石垣、白亜の殿堂としての近世城郭の華やかさはないが、展示された陶磁器のなかに広い交流をうかがうことができる。また木器などのなかに当時の生活をしのぶことができる。

城館跡から中世の歴史にせまる視点で、城館の写真パネルや絵画も活用しながら、わかりやすい展示を考えていきたい。

そして県内に二二〇〇以上分布し、身近なところにもある中世の城館が、当時の社会を反映する大事な資料であることを再確認し、出土する考古資料を新しい視点で見つめ直すきっかけにしていきたい。

セミナーや講演も 城館跡で

八月下旬から九月にかけて、五回にわたる考古学セミナーが開かれる。県内外より経験深い講師を招き、城館跡の見方、楽しみ方、調べ方など初歩から学ぶ。

十一月十七日、十八日には、講演会やシンポジウムが開かれ、

全国各地から城郭研究者が集う催しも開かれる予定となっている。

楽しい歴史の旅

例年催している春の遺跡めぐりは、六月二日（土）宮城県多賀城周辺。秋の遺跡めぐりは、一〇月十四日（日）西村山郡の山間部の遺跡を歩く。

うきたむ考古の会との共催による「みる・きく・ふれる遺跡の旅」は、福島県南部のいわき市周辺を歩き、桜井古墳・原町市博物館・装飾横穴古墳・大悲山石仏群・白水阿弥陀堂・埋蔵文化財センターなどを見学する。宿泊は塩屋崎の予定。

「縄文まつり」も 盛大に

体験教室では、「野焼きのための焼物教室」（六月・八月）、「勾玉つくり」（七月）、「縄文手芸教室」（十一月）などが開かれる予定である。

九月九日には、今年も盛大にかがり火を囲んでの幻想的な「縄文まつり」が催される。日中は縄文体験教室、夕方は縄文食試食会、月が出る頃からかがり火

を囲んで縄文太鼓の演奏や歌や踊りが披露される。昨年は一五〇名の参加があったが、今年は県外からも多くの参加が予想される。

冬季のイベント

雪におおわれる冬期には、「山形の発掘」二〇〇一年度発掘された県内陸部の調査報告会が二月に開催される。

また昨年から新たに公園管理組合との共催による「古代食試食会」が開かれる予定である。つくって食べる文字どおりの「健康食」。あらためて地域の伝統食を見直していきたいものである。



昨年の「北方古代世界への旅」北上市江釣子古墳にて

歴史公園で育てた雑穀を食べる 古代食の試食・試作会

古の里歴史公園で栽培した雑穀を食べてみよう、ということ。2月4日(日)にこの会は開かれた。昨年度は、アワヒエ、モロコシ、キビ、ソバ赤米、黒米、もち米、白米がこの公園から収穫された。何を、どのように利用するか経験もない私達が、何をつくれるか?そのため、今回の参加者のメインは、これらの穀物を育てた、歴史公園管理組合の地域の人達だ。

「幼い頃食べさせられた。」(おいしくなかったというイメージが強い!)という、管理組合の彼ら彼女達にとっても遠い思い出になってしまった雑穀類。

さて、タネを蒔いたものの、草取りをしようにも雑草との見分けがつきにくい。

これらは全てイネ科、そして屈強な雑草の品種改良から生まれたもので、雑穀はもとも古くからの形質が強い。

エノコログサも粟の先祖だったりする。農作業に熟練した彼らの勘で草取りをお願いし、雑草より一回り背高く育ったそれらは、無事刈られて軒下に干すことができた。その後、おばちゃんたちの楽しいおしゃべりと共に、丁寧にたいて脱穀され第一幕終了。

その後、初摺り機にかけて穀を取り除かなければならない。摺り圧を変えながら、モロコシとキビは順調に終了。モロコシは赤く、キビは

両日のメニューより

【2月4日(管理組合主体) 3月25日(考古の会)】

- ・そばかもち
- ・そば【ネギ・辛味大根のたれ】
- ・だんご【赤米・黒米・モロコシ+17マ&クミのたれ・リウ外あんこ・きな粉、町内団子屋さんの持ってきてくださった、アズキ渡し餡、ごま餡、みたらし餡】
- ・餅【キビ餅・アワ餅】
- ・雑穀ご飯【雑穀をミックスしたものと米、ヒエ入りご飯、モロコシ入りご飯、赤米の玄米ご飯、赤米の5分搗きご飯】

機にかけて穀を取り除かなければならない。摺り圧を変えながら、モロコシとキビは順調に終了。モロコシは赤く、キビは



だんごづくり「こねる」

丸々したきれいな黄色で鮮やかだ。ヒエ・アワは粒が小さくまた、量が少なく、初摺り機械で穀取りができなかったため、今回は岩手から試食会用に購入した。その際に発見したアワとキビの混同や、それぞれに粘り気の少ない「うる(粳)」と粘り気のある「もち(糯)」があることや、全ての経験を経て、ようやく手をかけて食材に変身した。そうして、それらを口にすると

ことができたのだ。

ソバに関しては、町内の二井宿ソバの会の方にお願ひし打って頂いた。

餅や、雑穀ご飯は前日から水に浸して準備をした。だんごは、それぞれの粉100%でも可能であるが、餅米の粉も少々足して食べやすく作ってみた。自分達で作ったものは何よりおいしい。わいわいがやがや、だんごをこねたり、ソバをこねたり、次々に出来たものを試食していく。それほど食べたわけでもないのに雑穀は腹持ち良く、あつという間にお腹が膨れる。米に代わるカロリ―源として確かにふさわしいようだ。特有のわずかなエグミや香りも、毎日食べるわけではない私達にとっ

ておいしいさのうちだ。そして赤、黒、黄色などと、見た目も楽しい。団子というものは、もともとは仏様を祭る供え物のことだが、祭りなどのハレ

の日にピッタリな華やかな団子だ。

ただ、多くの種類を作りすぎたせいかな...?それとも、おかげがないせいかな?粒のまま味わつてもらおうと用意した雑穀入りご飯の売れ行きはあまり良くなかったようだ。

つい最近まで、このあたりでもかなり利用され栽培されていたはずの雑穀が今まさに忘れられて行くところ、つい先日も栽培ヒエの最後の等級検査が行われたと報道されていた。

食の問題からも、農の問題からも、もう一度見直されるべき雑穀類。あなたの記憶の中に雑穀はありますか?

(宇佐美)



アワ



キビ



タカキビ
(モロコシ)



黒米とだんご

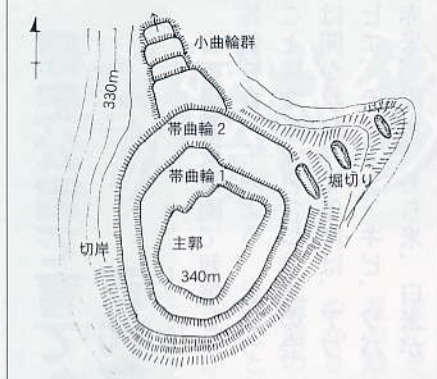
戦国時代の館跡

亀岡館に登る

春また浅い頃、館の職員研修で「亀岡館」に登った。亀岡文殊

の南側にそびえ、米沢へ向かう道路に面しており背後には急峻な亀岡文殊山がそびえる。

亀岡の集落側の北から登りはじめたが、雑木林の間の路もな急な斜面を登ること約三〇分。山頂の平坦地、主郭にようやくだどりつく。途中北側の登り道には、十五段にわたって小さな曲輪群が階段状に連なり、下の山麓より上がったところで大



亀岡館主郭周辺縄張図(山崎・青木敏雄氏作成原図をもとに再作成)

きな曲輪が二段にわたってひろがっている。

主郭の平坦地は、五〇×四〇メートルほどの南北にや長い不整形形で、平坦にならされている。ここには何棟かの建物があり、まわりには柵などがめぐっていたのであろう。標高三四〇・九メートル、麓からの比高一二〇メートルほどである。地元では「館の山」とよんでいる。

主郭の周囲には、二段にわたって帯曲輪がめぐりさらに文殊山に広がる東側は、巨大な堀切りが三条にわたって設けられている。まことに堅固な山城である。虎口(郭に入る入口)は、おそらく曲輪群をつたって北側にあったのであろう。道形が残り、山頂近くに門があったと思われる、門柱の

礎石風のがみられる。

この館の山の西北の平地部に単郭方形の館跡があった。ほぼ一町四方を堀で囲んだ居館跡であるが、あるいは「詰の城」に対する「根小屋」ではなかったのか。

おそらく一六世紀代の地域土豪の城館で、伊達氏に連なるものが米沢への街道を意識して、また文殊の里が戦火の巷となることを避けるために設けられた館のように思われる。

米沢城や高島城など領土の拠点的な城館のほか、いたるところに山城が築かれ、そのための一大土木事業が行われた。それは庶民をも巻き込んで、国中総武装化の状況であった。このような中世の時代を解明するキーポイントが、地域に分布する城館跡である。

我が館の展示品⑧

大在家の木器

どの遺跡からも木製品が出るとは限らない。木は腐るので、いつも水通しがよいなどよほど条件がよくないと残らない。一二〇〇年も前の木器が高島町大在家遺跡から多量に発見される。

県立高島高校や高島小学校の東の方一帯は大在家の地名が残されており、そのさらに東側が小郡山で、置賜最初の郡家(郡役所)があったとい

われるところである。木器群は古い時代の川跡から出土した。多分東の方から流されてきたもので、奈良時代の須恵器や土師器といわれる土器の破片などとともに発見された。

町の教育委員会で保存処理が済んだものを展示しているが、田舟・盤・皿などの他、馬・人・矢型などがある。後者は、呪術的な祭祀具で、役所において公的に行った魔除けなどの祭祀に用いられたも

の。この近くに郡家があったことを裏付ける貴重な資料である。田舟は、長さ一メートル、幅四〇センチほどの浅い箱型で、両端に二か所ずつ突起がある。湿田で稲の苗を運ぶときに用いられたもの。材質はトチノキらしい。盤や皿はロクロで整形されて、皿は黒塗り。

年代はともに出土した土器から考えて、七世紀末から八世紀初めと推定され、当時の生活を物語るだじじな資料である。



大在家出土の木器
左 馬形・矢形・人形の呪具
右 漆塗り皿

(高島町教育委員会保管)